

2021年1月28日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

急性期病院に入院する中年期パーキンソン病患者の
Quality of Lifeの実態と看護実践の考察
～SEIQoL-DW (Schedule for the Evaluation of Individual
Quality of Life- Direct Weighting Procedure)を用いて～

Discussion of Nursing Care and Quality of Life
of Middle-Aged Parkinson's Disease Patients
in an Acute Hospital

～Analysis Based on SEIQoL-DW(Schedule for the Evaluation of
Individual Quality of Life- Direct Weighting Procedure)～

18MN308

氏名 吉本 巧

要旨

【目的】

本研究は、急性期病院に入院する中年期パーキンソン病患者を対象に、SEIQoL-DW を用いた QOL についての当事者の語りから QOL の実態を明らかにし、その結果から看護実践を考察することを目的とした。

【方法】

研究デザインは SEIQoL-DW の測定と半構造化面接調査法による質的記述的研究。研究対象者は急性期病院に入院する中年期パーキンソン病患者 2 名であった。分析方法は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) の手順を一部参考に、患者が自身の疾患にどう向き合い、対応・判断し、生活を営む中で何を語るのかに着目しカテゴリー化、パラダイムを用いた現象毎の分類を行った。

【結果】

2 事例を統合した結果、13【カテゴリー】が抽出され、パラダイムを用いた現象毎の分類において 4 つの現象が QOL の実態として明らかとなった。つまり、1.【症状を抱えながらも目的や信念を持ち、働き続けられる】、2.【症状進行や家族環境の変化、社会的役割が変容しても家族の繋がりを大事にし続けられる】、3.【食事へのこだわりや好きな食べ物を選び続けられる】、4.【できないことが徐々に多くなることで、不安や残念さ、悔しさを感じる】であった。

【考察および結論】

4 つの現象から、①退院後も働き続けられるように ADL の維持・向上に努め、症状に応じて仕事が調整できるように働きかけを促すこと、②患者が家族との繋がりを保てるように関わること、③食事そのものが安全に摂取できるように関わり、患者が自己を保ち続けられるために可能な限り食事の選択の機会を提供すること、④患者ができていることや頑張っていることを本人に伝え、患者の持つ力を最大限に発揮し、自力でできることを実感してもらい、自己の成長に繋げ、前向きな気持ちへ移行できるように関わることを看護実践として重要と示唆された。

本研究は、少数事例からのデータ分析であり一般化はできない。今後、症例数を増やし、本研究結果の信頼性を高めることが課題である。